要約

本論文は、本土に比べて経済活動上不利な条件とされる瀬戸内海の島嶼を対象とし、内部・外部の資源とその利用のあり方の考察から、人びとがそこでの暮らしをどのように成り立たせているのかを検討したものである。

近年、地方創生という言葉とともに地方社会へ再び注目が集まり、地方の地域社会の存続をめぐり、資源利用に関する活発な議論がなされている。中央集権体制確立以降、地方社会は国家を支え続けてきたが、そこでは人やモノの中央への収奪があり、人びとの生活は外部依存を強めてきた。本論文は、外部に依存しながらも、暮らしのなかで共同性がどのように立ちあがるのかという観点から、地方の地域社会の存続について検討しようとする試みであった。

本論文で扱う資源というコトバは、その権力性が問われる概念でもある。そうした資源を利用という暮らしの場からとらえ、その多様なありようを考察することで、国家という枠組みから論じられる資源配置について本論文は再考している。

島は四方を海に囲まれている。そこでの暮らしは島外との交渉を多少なりとも常に要し、外部に多くを依存することとなるため、外部の環境変化の影響を受けやすい。明治以前より交通運搬で活発な交流を展開しながらも、後背地を持たないことなどを背景に急激な変化を経験してきた瀬戸内海の島は、そうした状況に対応するため、互助の経験が蓄積された場所であるともいえよう。

本論文の目的は、人びとの生活が外部へ依存しながら、どのように共同性を生じさせているのか、内部と外部の資源利用のありようを考察することである。そうした考察をつうじて地方の地域社会の存続について検討している。

本論文の構成は下記のとおりである。第 1 章では、問題背景を整理したうえで、上記の問いを設定した。また、その問いに取り組むために、岡山県笠岡市白石島を対象とし、5 つの課題を検討した。

第 2 章は、白石島の自然的・地理的条件をふまえ、この場が社会からどのように位置づけられてきたのか歴史的に考察するとともに、島の資源および社会的・経済的条件における人びとの資源への働きかけの記述を行った（課題 1)。こうした島に関する記述、および個々の人びとの人間関係や社会関係に関する語りなどによって、外部への依存のなかで形成されたコミュニティが互助にもとづくものであったことを示した。

第 3 章では、生活をよりよくするために結成、維持されている点において資源といえる地域組織が、生活変容に応じて、住民によってどのようにつくり変えられてきたのか考察を行った（課題 2)。過疎化現象においては、集落機能の空洞化が指摘されることが少なくない。近年島であらたに結成された組織が、島のほかの組織との関係において、どう変化してきたのか論じた。結論として、このあらたな地域組織は、そこでの暮らしに合わせて島の内外を媒介していることが明らかとなった。

第 4 章は、1920 年代後半以降、文化財化してきた島の盆踊り「白石踊」を対象とし、その踊りを継承している人びとが、踊りにどのように働きかけ、踊りを自らの生活の資源としてきたのか検討した（課題 3)。「白石踊」は文化財として外部に価値づけられながらも、その踊りは生活の場の社会関係を繋ぐような資源ともなっていた。つまり、様々な文脈を包摂するなかで、資源の内外の二重性を維持していたのである。

第 5 章は、地域伝統文化である「白石踊」という資源が持つ外部性と、その資源への働きかけのなかで現れる共同性との葛藤の乗り越えがどのように行われようとしているのか明らかにするために、地域伝統文化を継承する組織による観光の場で生じた葛藤への対応を検討した（課題 4)。具体的な日程や場所の変化や踊りに関する語りから、人びとは踊りを固定的なものとしてとらえていないこと、葛藤が生じた際には人びとは生活の場を起点としながらその場を再解釈していることが明らかとなった。

第 6 章は、外部の価値づけを契機に、資源が内部／外部の二重に価値づけられていくプロセスと、その事業の展開を可能にする島の関係性について検討した（課題 5)。白石島では見通しが悪くなった道路をよくするため、休耕地を世話する取り組みが以前よりボランティアで行われていた。2009（平成 21）年より、その休耕地に自生している桑を用い、商品化を目指す取り組みが開始した。桑を利用した取り組みの展開プロセスでは、桑という資源に対する外部の価値づけを受け入れながらも、同時にそれとは一対関係にはならない語りがみられた。それは利益追求の組織形態でありながら、互助的なコミュニティ維持の事業であるという二重性の現れだといえよう。

これらの課題の検討をとおして明らかにされたことは、白石島の人びとは資源に働きかける際、外部の価値づけを受入れるが、それを固定化させることなく生活に生かせるよう資源に働きかけていることである。また、本論文の事例では多様で多重な資源利用のあり方を確認することができる。経済的利益の追求に関わる資源への働きかけについても、その利用の多様性は見いだされる。そこには互助的な共同性が見られ、こうした実践は資源に働きかける人びとの生活に即したものであった。

つまり、資源配置を論じるためには、各々の地域における資源利用のあり方を考察することがまずは不可欠であり、そこに生活の視点を備えることは有効なことだとする。